

私の試みた、つたない「実験」

刈田 均（横浜市歴史博物館 学芸員 / 共同研究員） KARITA Hitoshi

現在博物館の現場にいるからか、今回COEの実験展示の共同研究員に関わらせていただくことになった。横浜市歴史博物館の準備室に勤務してから15年、博物館という場で行われるさまざまな活動に従事してきた。そのひとつである企画展には計8回ほど関わった。それぞれの企画展は、テーマやコンセプトはもちろん予算規模や条件も異なるため、毎回毎回が自分にとっての「実験」であった。ここでは自分が関わった企画展のなかで試みた、つたない「実験」のいくつかを記してみたい。

初めての企画展を担当したのは博物館が開館した翌年、1996年春である。博物館が立地する横浜市都筑区「港北ニュータウン」のかつてのくらしの様子を紹介することが主題であった。いわゆる民具や生活用具の展示では、国立民族学博物館のように同種の資料を圧倒的な量で示しモノが自从来館者に情報を語り始めるような展示手法と、江東区立深川江戸資料館のようにそのモノが使われた状況を再現して来館者が空間的に当時を疑似体験できる展示手法、いわゆる生活再現展示が企画展でも有効な方法であると自分では考えてきた。このときは後者を試み、企画展示室内に開発以前の農家の一角を実物大で再現した。来館者の反応は良好で、生活再現展示が資料の持つ情報を見る側に伝えたり理解を促す有効な手段であることを実際に確認でき、この時から疑似体験できる空間をポイントに置いて展示を構成するようになった。

2回目・3回目の企画展示を進めていく中で、展示に伴う出版物について考えることがあった。博物館では、企画展と同時に図録が出版されることが多い。期間が限定される企画展では、会期終了と同時に展示空間が失われ、展示資料が再び集まる機会はずがない。展示資料を集成して解説を加えた図録は大切な企画展の記録となる。ところが、図録はあくまでも二次元で構成される印刷物であり、情報は掲載された資料写真と図版、文字情報を用いて発信される。展示空間で実物資料を中心に三次元で発信されていた情報とは種類も内容も異なってくる。すると、展示を見ていない人にとっての図録は、解説付きの資料集にしかすぎなくなることすらある。そこで自分は、企画展終了後も一般の人に展示の意図を伝えられる印刷物が必要ではないかと考えた。平易で十分な量の文章と資料写真や図版を掲載し、三次元の展示を見ていない人にも印刷物という二次元の世界で意図をクリアーに

伝えられるものである。たとえすべての資料が掲載されなくても、展示の意図が明らかに表現されていれば、記録の役割も果たすことができる。自分の中ではこれを図録とは言えないため、関連出版物と名付けることにした。99年以降は展示の内容に応じて図録と関連出版物のどちらが有効かを考え、制作するようになった。

2002年の秋に初めての特別展を担当することになった。神奈川大学日本常民文化研究所と共同で開催した「屋根裏の博物館 実業家澁澤敬三が育てた民の学問」という展示である。展示は神奈川大学が継承している日本常民文化研究所を設立した実業家、澁澤敬三の学問的な業績をたどることを目的とし、敬三の活動を時系列的な流れに基づいて構成する計画であった。この時、どのように展示内容を伝えるが問題となった。展示は実物資料を中心に映像や解説文などさまざまな情報によって構成されるが、解説文は一般に200字程度が適当と考えられている。展示空間で長い解説文を用いると、実物資料が発信する多様な情報をスポイルしたり、見る側に過度の疲労を与えるといったデメリットがあるためである。けれども、配置される実物資料や図版、画像資料を時系列に沿って伝記的に説明していくには、どうしても長い文章が必要となった。悩んだあげく選択したのは、定説に逆らい、展示空間に長い解説文を用いる試みであった。当然読んでもらえなければ展示の目的は達せられない。理解しやすく疲れない文章、とりあえず読んでもらえる文章を目標にし、主人公である澁澤敬三を語る三人称として「敬三さん」という親しみやすい言葉を用いるなど、子どもに澁澤敬三の伝記を伝えるつもりで作文に取り組んだ。このときの展示空間に配置した解説文（キャプションは除く）は合計16,231文字、原稿用紙約40枚余りとなった。展示の入館者数は目標には届かなかったが、解説文の「敬三さん」という言葉使いが好評で、長い文章にもかかわらずすべてを読んでもくれた来館者が結構いたことが印象に残っている。

ずらずらと記してしまっただが、これまで自分が経験した企画展で試みたつたないいくつかの実験とその自己評価である。今回のような「実験」に取り組むのかはまだわからないが、この与えられた機会をぜひ活用させていただきたいと考えている。

田中 裕子